

御物本『扇面散屏風』主題の再検討 —保元・平治物語図としての解釈—

五島美術館

下山來夏

宮内庁三の丸尚蔵館蔵『扇面散屏風』は、下地に俵屋宗達筆と伝えられる四八枚の扇面画を散らし貼りにした八曲一双屏風である。各扇の主題については、保元物語絵二〇面、平治物語絵一六面、保元物語ないし平治物語絵二面、伊勢物語絵四面、西行物語絵一面、草花図五面、という山根有三・小林忠両氏による図様の取材原本を基にした分類が、ほぼ定説化している。各種の主題が入り混じること、さらに貼付される各扇の順序の統一が図られていないことなどから、扇の配列は物語の展開とは関係なく、主に装飾的效果を狙ったものである、と論じられてきた。現在は『扇面散屏風』『扇面貼付屏風』という呼称が定着し、ことに意匠性が着目されている。

しかしながら、四八枚中三八枚以上が「保元物語」「平治物語」における諸場面を描いているにも関わらず、本屏風における物語性、すなわちそれぞれの物語と本屏風の描写内容・構成との連関については、十分に検討がなされていない。扇の配置に着目すると、保元物語絵は右隻全体と左隻第三扇目までに、また平治物語絵は左隻第四扇から第六扇にそれぞれ集中しており、扇の貼付の構成法と「保元物語」「平治物語」本文との関係性には再考の余地があると思われる。

そこで、発表者は「保元物語」「平治物語」のテキストと各扇面を対照させ、改めて場面比定を試みた。その結果、扇の配列はほぼ物語の展開に沿っていることが判明した。さらに、第六段芥川、第二三段高安の女、に取材している扇について、そこに描かれた雷神、鬼、そして富士山、といった題材が、実は「保元物語」にまつわる怨霊や東国源氏将軍の系譜を想起させる仕掛けとなっていることが見出された。

本発表では、従来、伊勢物語絵とされた扇、加えて、主題不明とされた扇が「保元物語」の諸場面を表していることを、新たな見解として示したい。さらに、扇の配置と物語の進行との一致を提示しつつ、本屏風が『保元・平治物語図屏風』として一貫した主題を意図していることを明らかにする。

本屏風を、『保元・平治物語図屏風』としてみると、高度な装飾性を保ちつつ、既存の図様を再利用しながら豊かな物語性を与える宗達工房の手腕が、改めて鮮明化する。ついで、扇に取り上げられる物語の場面において、乱の敗者である崇徳上皇側や、朝廷のために奮迅する武士たちに焦点が当てられる様子からは、本屏風の制作意図が浮かび上がる。本屏風は1620年代制作とされる。徳川氏による朝廷への圧力が強まり、「保元物語」「平治物語」の時代状況とも重なる王家と武家との緊張関係が深刻化した時期の制作であることは、本屏風誕生の背景を物語る上で、極めて重要であると考えられる。